

《エールホームクリニック長岡》の 医療イノベーションで もっと住みやすいまち長岡へ

2020年4月に（医療法人メディカルレットバレーMBV）を立ち上げ、同年10月には下柳に（エールホームクリニック）を開院。2022年3月に（エールワクチンセンター）を千秋にオープンし、2023年10月（エールホームクリニック長岡）を長岡駅前が開院。進める（MBV）を1年間にわたり編集部が取材し、12回の連載としてお届けします。

長岡市中心市街地の再開発事業「米百俵プレイス北館」の医療ゾーンに（エールホームクリニック長岡）が昨秋にオープンしました。長岡市長が掲げる「長岡版イノベーション」のひとつ、医療イノベーションがスタートし、より市民の健康サポートが期待されています。今回は新しい医療のカチを模索しながら進捗する、同クリニック院長の田村先生に、新春インタビューを行い、今後の展望を伺いました。



長岡駅前の《エールホームクリニック長岡》では、内科、皮膚科、美容皮膚科、リウマチ科、アレルギー科、呼吸器内科がそろい（エールホームクリニック長岡）5名の医師とスタッフが診療にあたります。

第1章 健康を守るまちづくり 長岡駅前に 大型クリニック誕生

編集部（以下、編）：おめでとうございます。エールホームクリニック長岡の開院から、はや3か月です。田村先生が下柳のエールホームクリニックにいらした頃から何度かインタビューをさせていただいたのですが、柔らかい物腰と芯の強さを感じていました。やはり院長になられたんですね！とても小柄なのに、どこにそんなパワーが？

田村先生（以下、先生）：ありがとうございます。パワーなんてないですよ（笑）。私は（エールホームクリニック長岡）の院長ではありませんが、当院が掲げる「チーム医療」体制のおかげで、縦割り組織でなくフラットな感じで働いています。

編：組織が大きくなるからこそ、「チーム医療」の役割が大切になりますね。

先生：そうですね。スタッフも医師も総合医マインドを持ちつつ、専門性を活かしていくという考え方は、下柳も駅前も同じです。

編：先生は下柳から長岡駅前に異動されたわけですが、下柳との違いはありますか？

先生：まず、公共交通機関が使えることで、患者さんが便利になったということでしょうか。今まで車移動がネックだった人にとっては選択肢のひとつとして、来院される方もいらっしやいます。

編：確かにそうですね。車移動でも、併設されている立体駐車場なら雨に濡れる心配もありませんし、クリニック利用時間は無料ですし、とても便利です。

先生：バスも便利なので、高校生も増えた気がします。より多世代の方が来院しやすくなったと思います。

第2章 各種検査機器で 安心して 検査を受けたい

編：そういったお話を聞くと、やはり長岡市の掲げる再開発事業の中心として（エールホームクリニック長岡）が駅前に必要だったと感じます。

先生：仰るとおりです。長岡駅にはビジネスマンが多くいるので、健康診断で引っかけたけど、今まで医療機関に行けていなかった方が気軽に来てくださいやすくなったと思います。働く世代もしっかり支えられるお手伝いできているかな、と。

編：開院前に行われた9月30日の竣工式では、磯田伸長岡市長も「イノベーション」のシンボルである「米百俵プレイス」に、医療の要素が加わることで、まちの姿が整ってきた。中心市街地の居住が増えている中で、市民の安心につながる。今後も新しいチーム医療を提供していただき、新潟県の医療を含め、日本の医療を変える、大きなチャレンジになっていただきたいと思います」と仰っていますね。



2023年9月30日に《エールホームクリニック長岡》の竣工式を開催。磯田長岡市長をはじめ多くの方が参加し、テープカットセレモニーにて開院を祝いました。

第3章 地域の健康を守りたい 医療イノベーションで

先生：まず、エコー検査やCT検査も同様ですが、仮に治療やさらなる検査を急ぐ所見があった場合、その検査結果を持って総合病院にも紹介が可能です。

編：ある程度、検査ができた状態で紹介していただければ、総合病院でも処置が早まりますね。では、エコー検査やCT検査では、とんがりがわかりますか？

先生：まずエコー検査は、痛みも被ばくもなく多くの情報を得られる画像検査です。病気になる前はCTやMRIよりも有用なこともあります。心臓の動きを確認したり、腹痛の原因を調べることももちろん、頸部や関節も見ることが出来ます。それからCTは、レントゲンの検診でひっかかった方や、咳、痰症、症状が長く続くなどの肺病変の精密検査が可能です。

編：最後に骨密度検査ですが、これは簡単に調べられるのでしょうか？

先生：とても簡単に検査装置の上に寝るだけで骨粗鬆症の評価がしっかりと出来ます。最近では「ホームページを見て、骨密度が検査できると知って来られた」という方や、通院をしている方が「身長が前より縮んできた」という理由で気軽に検査されています。



田村 真麻（たむら まあさ）
《エールホームクリニック長岡》院長
内科医師／医学博士
神奈川県横浜市生まれ
長岡赤十字病院総合診療科・リウマチ科
副部長を経て現職
総合内科専門医
リウマチ専門医・指導医
アレルギー専門医
日本リウマチ学会 登録ソングラファー



女性が活躍する同クリニックでは、チーム医療で連携。

編：ここでは、田村先生が描く「医療イノベーション」についてお伺いできればと思います。「エールホームクリニック」といえば、新型コロナウイルスで世話になった方も多々ありますが、今年の3月末で無料接種は終わり、自己負担になりますよね。「エールワクチン」というイメージでしたが、それも落ち着くと思います。そうなったときに、田村先生が描く「エールホームクリニック長岡」の未来とともに、どのような医療イノベーションをお考えになっているか、教えてください。

先生：まず、公費での新型コロナウイルスワクチンは終わってもワクチンの受け入れ体制は残り、発熱外来の対応も継続していきます。今後としては、自由診療と

先生：これはずっと考えていることなのですが、地域医療を支えたいと思っています。今まで長岡には3つの大きな総合病院と、個人病院や一般的なクリニックという大きく分けて2つだけの構造でした。けれども、今はこの病院もクリニックも満杯で、先生も疲弊していると思うんです。当院の役割は、その間に入ることでそれらの負担を減らしたい、という強い思いがあります。

編：つまり、総合病院とクリニックとの、橋渡しの役割ということでしょうか？

先生：その通りです。そのために、しっかりと検査機器を準備して、ある程度クリニックで評価できるようなにしたり、当院でできる体制を整えたい。例えば、病院に行くには敷居が高い、一般的な個人クリニックだとどこまで診てもらえるか心配とされている人の受け皿になれたらと思っています。

編：全国的に見ても、長岡市は医師不足ということの問題になっていますよね。

先生：そうですね。総合病院やクリニック、そこで働く人たちの負担を減らしたいという気持ちがあります。総合病院の役割、地域のクリニックの役割をしっかりと発揮するためには、当院のような中間の



(MBV)の医師・スタッフ皆さん

まずはエールへ！
総合クリニックとして医療からはじまる
長岡のまちづくりを支えます。